

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	尾 矢 貞 雄
2. 審査委員	主 査：（上越教育大学 教授） 渡部 洋一郎 副主査：（岐阜大学 教授） 安 直 哉 委 員：（兵庫教育大学 教授） 吉川 芳 則 委 員：（上越教育大学 教授） 押木 秀 樹 委 員：（岐阜大学 教授） 小林 一 貴
3. 論文題目	「三度の繰り返し」に着眼して文学的な文章を読み解く方法の開発に関する研究
4. 審査結果の要旨	論文提出による学位申請者 尾矢貞雄 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行なった。 論文審査日時：令和7年2月1日（土） 15時00分～17時00分 オンライン(zoom)による審査 1. 学位論文の構成と概要 本研究は、義務教育年間における文学的な文章の読解において、場面を単位として継時的に全体構造をとらえ、物語の基本4場面構成（「前ばなしの場面」「出来事の展開場面」「クライマックスの場面」「後ばなしの場面」）で読み解いていこうとする、顕在的な「表の筋」の把握が主流をなす読解指導の現状に対して、物語の展開を暗示したり方向付けたりする、潜在的な「隠れた筋」を読み解くための方法の一端を提案することが目的である。 第1章では、物語の構成要素や構造の理解に関する先行研究・先行実践の整理、そして学習者の物語読解に関わる理解の現状分析を踏まえた上で授業化の方向性について検討した。これまでの先行研究や先行実践の整理から、物語に潜在する筋の展開を読み解くことの重要性は指摘されているが、その具体的な方法論の提案は十分になされていないことを明らかにした。また学習者は、物語を俯瞰的に見て、人物相互や場面相互がどのような意味の関係によってつながっているのかを捉える力や、物語に仕掛けられた展開の工夫（表現技法）を読み解く力に課題があることを明らかにし、「文章の構造に関わる理解」や「文章の特徴の把握」、「物語の基本的な構成要素に関わる理解」について指導の工夫や改善が求められていることを明らかにした。 第2章では、物語の基本的な構成要素の理解に関わる先駆的な研究である物語文法の理論と、ロシア・ヨーロッパ・日本における昔話の構造研究の理論を整理し、物語に潜在する「隠れた筋」を捉える読みの方法論の構築に向けた検討を行なった。Mandler & Johnson(1977)は、民話や寓話、神話といった口頭伝承の物語に見られる構造を研究し、物語が「設定」と複数のエピソードの連鎖によって成り立つとする物語文法の書き替え規則を考案した。そして、エピソード

ドが「(発端部) + (展開部) + (結末部)」をもつ単位であること、物語を構成する複数のエピソードが意味的な関係性によって結合していることを明らかにした。この口頭伝承の物語の構造理論の研究は、Mandler & Jhonson の他にも違ったアプローチの研究が存在し、Prop(1968) やリューティ (1969), 小澤(2009)の昔話の構造研究から、ロシアやヨーロッパ、日本の昔話に共通する展開の特徴として、たびたび「三度の繰り返し」が見られること、「三度の繰り返し」は三度目の大きな展開を見せることを整理した。稿者は、Mandler & Jhonson のエピソードを単位とした、エピソード間に存する意味の関係性への着目、そして「反復」と「対比」という「強調」の表現技法を併せもつ昔話の構造に着想を得て、エピソードの「三度の繰り返し」に着眼することによって、物語を俯瞰的に捉えるだけでなく、中心人物の変容を捉えることができるのではないかと考え、新たな読みの方法論を考案した。

第3章では、小学校の国語教科書に採録される物語 319 作品を対象に、エピソードの「三度の繰り返し」の構造分析及び新たな読みの方法論の効果について検討を行なった。構造分析の結果、エピソードの「三度の繰り返し」構造をもつ作品は 40 作品(全体の 12.5%)存在した。そして、エピソードの「三度の繰り返し」に着眼して読むことにより、「物語の全体構造を把握することができ展開を予測して読み進めること」、「何が変化し、何が変化しないのかを容易に捉えることができ作品の主題に迫ること」、「人物像や人物相互の関係性を捉えること」が期待できることを、実際に教材文を用いて明らかにした。

第4章では、中学校の国語教科書に採録される物語 179 作品を対象に、エピソードの「三度の繰り返し」の構造分析及び新たな読みの方法論の効果について検討を行なった。構造分析の結果、エピソードの「三度の繰り返し」構造をもつ作品は 41 作品(全体の 23%)存在した。そして、エピソードの「三度の繰り返し」に着眼して読むことにより、小学校の分析と同様に「何が変化し、何が変化しないのかを容易に捉えることができ作品の主題に迫ること」が期待できることを、実際に教材文を用いて明らかにした。

第5章では、エピソードの「三度の繰り返し」の特徴や傾向に関わる小学校と中学校の比較分析を行なった。小学校、中学校の教材はともに「単数型」が多く、その構造上、大きな差異は見られないこと、エピソード間の意味の関係性を読み解く難易度は、小学校よりも中学校の方が高いこと、中学校教材の方が、小学校教材よりも解釈の多義性を有していることという三点の特徴を明らかにした。また、「三度の繰り返し」の「反復」に着目することによって、中心人物の人物像が明らかにできること、「対比」に着目することによって、中心人物の変容を捉えることができることを、実際の教材文を用いて明らかにした。

第6章では、異なる物語の構造が共起する作品を読み解く方法について検討した。エピソードの「三度の繰り返し」構造を分析する過程で、「額縁型構造」を併せもつ作品が複数存在することが分かってきた。そこで、異なる二つの構造が共起する作品に見られる特徴について分析を行なった。その結果、エピソードの「三度の繰り返し」構造に「額縁型構造」が共起する割合は、小学校では 12.5%, 中学校では 26.8%であった。そして、エピソードの「三度の繰り返し」のほとんどが、「額縁型構造」の「絵画(回想部)」に出現することが明らかになった。また、エピソードの「三度の繰り返し」には「中心人物の変容」や「作品のテーマ(主題)と結びつく内容」が表現される傾向にあることを明らかにした。

上記の概要から本研究の成果として、エピソードの「三度の繰り返し」に着眼して物語を読む方法論を開発したことが挙げられるが、この新たな読みの方法論の有効性として、次の4点を挙げるができる。

第1に、物語の全体構造を把握でき、展開を予測して読むことが期待できることである。物語構造図を用いることにより、エピソードの「三度の繰り返し」を視覚的に捉えられ、各エピソード

ソードがどのような意味の関係性で結合しているかが把握できる。エピソードの「三度の繰り返し」は「反復」と「対比」によって構成されるので、一定の予測のもとで物語を読み進めることができる。

第2に、物語の主題に迫ることができることである。「反復」と「対比」は、文学における強調の表現技法である。エピソードの「三度の繰り返し」に着眼することにより、何が反復され、何が対比されているのかが顕在化し、中心人物の変容を捉えやすくなり、それは作品の主題を考える上で重要な視点となる。

第3に、人物像や人物相互の関係を捉えられることである。物語にはエピソードを単位とした「三度の繰り返し」だけでなく、人物の行為が三度繰り返されることがたびたび見られる。人物の行為の反復は、人物の人柄や考え方を顕在化させる。

第4に、「額縁型構造」と構造が共起する場合、エピソードの「三度の繰り返し」が「中心人物の変容」や「作品のテーマ（主題）と結び付く内容」を表す傾向にあることである。この場合、エピソードの「三度の繰り返し」に表現される内容は、物語の主題に関係する内容であることを念頭に読み進めることができる。

2. 審査経過

本論文は、小学校・中学校における文学的な文章の読解における、学習者が抱える読みの課題を克服するために、場面を単位として継時的に物語の全体構造をとらえようとする学校現場の読みの授業を問い直し、物語に潜在する「隠れた筋」を顕在化させる読みの方法論の開発を目指したものである。

独創性に関しては、エピソードの「三度の繰り返し」構造をもつ物語が、全文学教材中、小学校で約1割、中学校では2割以上あることを明らかにしたことである。昔話に特徴的な構造が、義務教育年間の教科書に所収の物語に、一定数以上存在していることを明らかにしたことは即ち、昔話の構造が、様々な物語の創作に影響を与えていることを示唆するものである。エピソードの「三度の繰り返し」は、現代の国語科教科書における物語文法の1つとして捉えることもできよう。また、「三度の繰り返し」がもつ「反復」と「対比」の強調表現に着目し、「三度の繰り返し」が物語の主題や中心人物の変容を表現していることを明らかにしたことも大きな提案性として評価できる。物語を読むことを苦手とする学習者に対して、教材文に適した読みの方法論を提供することは、学習者の学びを助けることに直結する。特徴的な構造や表現技法をもつ作品には、それらの構造を顕在化させる個別具体的な読みの方法論の獲得が求められる。本論考は、特徴的な構造をもつ作品を読み解く有効な方法論の1つとして認定できるであろう。

また、「三度の繰り返し」構造を、「額縁型構造」という構造との関係性から捉え、構造が共起する場合の読みの方法論を提案しているが、これは学習指導要領が求める「表現の効果」を捉える指導の方法を考えていく上で有益な示唆を与えている。学習指導要領では、比喻や反復といった個別具体的な「表現の技法」の理解を基に、「感動やユーモアなどを生み出す優れた叙述、暗示性の高い表現、メッセージや題材を強く意識させる表現」といった「表現の効果」を読み解く指導へと発展させていくことを求めているが、どのような指導によって「表現の効果」を捉えられるようにするかについては言及していない。本論文は、「表現の技法」の理解を、比喻や反復といった個別具体的な「表現の技法」の視点から、物語の構造がもつ意味の理解にまでその範囲を広げ、「表現の技法」を俯瞰的、構造的、一体的に捉えようとする試みでもある。その意味で、本論考は、「表現の効果」を捉える指導の具体の1つとして発展性が期待できる。

以上の独創性と発展性から、国語科教育が求める「読みの力」を育もうとする本研究は、教科教育実践学に貢献しており、本委員会は研究の成果が、学校現場における国語科の文学的な

文章の読解授業の改善に貢献するものと判断した。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、尾矢貞雄の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。